〈インストラクター講習会開催報告〉

文献調査法の専門分野別最先端情報の共有へ向けて

―研究室内知識伝承者を養成するインストラクター講習会の試み―

仁上　幸治（所沢図書館）

1．はじめに

所沢図書館におけるインストラクター講習会の企画は、2008年1月の図書委員会で提案・了承され、4月、人間科学学術院とスポーツ科学学術院の両教授会で協力依頼が行われ、5月、両学術院計132研究室中21研究室から28名のインストラクターが選任された（主に大学院生）。6月4日、「研究室単位の「文献検索指導者」養成講座」と題して90分の講習会を開催。活発な質疑応答が行われ、キャンパス全体の情報リテラシーの底上げの必要性、専門分野別研究調査法の公開と共有への展望、パスファインダーの作成等の実践的な課題が確認され、研究室単位での知識伝承を目指す公式の取り組みを立ち上げることができた。

2．現状

大学の情報リテラシー教育への図書館による直接貢献策を仮に4つに区分して紹介する。

第一の柱は、図書館オリエンテーションである。学部では2005年度に復活させ、スポーツ科学部は学部オリエンテーションの中で１回、人間科学部はクラス単位の出前授業方式で８回実施。2006年度に両学部とも学部オリエンテーションの枠内に図書館のコマ（45分）で実施。2007年度からは35分で出席率ほぼ100％を達成した。

大学院には、2004年度まで図書館オリエンテーションの機会がなかったが、2005年度に研究科オリエンテーションの時間中に8分間の枠をいただき、2006年度に50分枠に拡大し、2007年度は「論文作成のためのデータベース検索法－先行研究調査の必須知識－」と題して、大学院レベルの文献調査法入門の講義を行った。出席率70％。2008年度はさらに60分枠に拡大、出席率60％、総合満足度3.94（5点満点）[1)]。

第二の柱はデータベース講習会である。3年生以上を対象に、昨2007年度は5月10日から6月5日に計9回開催、ゼミ単位の先行予約制と個人予約で計374人参加。今2008年度は、縮小方針に転換し、全5回で個人予約のみとし、座席数264に対して、予約者226、キャンセル9、最終予約者217、欠席者13、出席者204で予約出席率94％。当日予約なし出席者6を加えた実出席者210で定員充足率80％、総合満足度3.83であった。

第三の柱は授業支援である。ゼミは人間科学部では3年生前期から、スポーツ科学部では2年生後期から始まる。もしも、図書館オリエンテーションと基礎演習科目の直後の１年生後期と２年生前期に、文献検索演習科目が設置されていれば3年生のデータベース講習会までの間の空白が埋まる。そこで2007年度からの科目新設を目指して、人間科学部と所沢図書館・中央図書館とのあいだで協議が続いたが、残念ながら担当時間数が折り合わず実現に至らなかった。

第四の柱は教材提供である。映像教材『情報の達人』（DVD版）は、その監修に所沢図書館の私が携わった経緯から所沢キャンパスで撮影され、2007年2月に発売された。紀伊國屋書店のご厚意により20セットが無償貸与され、2007年度の人間科学部１年生前期必修科目「基礎演習」の教材として採用され、全27クラスにおいて2～3回視聴された。スポーツ科学部においても一部の授業科目で教材として利用された。2008年7月、オンデマンド教材として《CourseN@vi》上で配信する共同研究開発事業の契約が成立し、所沢キャンパス所属の計5千人強の教員・学生が学内外から利用できるようになった[2)]。

3．インストラクター講習会の狙い

情報リテラシー教育支援をさらに拡充するには、図書館側の組織と人員の姿勢が鍵を握る。論文作成に必須な文献調査のためのデータベース講習会は盛況であるが、全5回で合計200名程度の参加者数では、受講者数は1学年1200名の15％にすぎない。参加機会がなかった利用者にも同様の学習機会を提供するために、講習会のより一層の充実が求められていることは明らかである。

しかし、専任職員の減少と業務委託の拡大が進む職場環境が戦線縮小論を後押ししてしまう。図書館員自身が直接指導するより、利用者の自助努力を推奨してはどうかというスタンス変更のアイデアが浮上してくるのは半ば必然である。

そこで設定されたのが、第五の柱、インストラクター養成である。研究室ごとに指導者を養成し、最新の研究動向や文献調査法情報を蓄積・整理・伝承していただこうというのが趣旨である。

事前に、各研究室の教員に対して、インストラクターの望ましい条件として、1)データベース講習会を修了している、2)指導する意欲と姿勢がある、3)講習会の成果を教材資料としてまとめ、研究室ホームページ等へ反映させる技能がある、の3点を勘案して選任するよう依頼しておいた。

当日は、レファレンスサービスや講習会の中で蓄積されてきた図書館員の経験から、「なぜ指導が必要か」「なぜ活用できないのか」「どうすれば活用できるようになるのか」について、初心者に指導する側に必要な基礎理論と応用技能を247枚のスライドショーで解説した[3)]。

4．成果

今回は、21研究室とはいえ、所沢キャンパスにおける情報リテラシー教育の問題点、論文検索や所蔵検索で躓く原因、文献調査力を総合的に底上げする対策の必要性などを共通認識とすることができた点が大きな成果である。

5．アンケート結果

講習会直後に、《Waseda-netポータル》上で参加者アンケートを実施した。貴重なご意見ご要望が多数寄せられた。文献データベース検索について授業で学んだことがある利用者が3割程度にすぎないというアンケート結果から、情報リテラシー教育の体系的カリキュラムの弱点と、研究室での指導教員・上級生任せの現状が読み取れる。

記述には、現状と問題点について、「図書館の方々の『情報リテラシー教育を改善したい』という使命感がひしひしと伝わってきた」「すぐに図書館に調べに行きたい気持ちになった」「後輩に学術論文検索について伝えなくては！」など、前向きな感想が目立った。また、「もっと具体的な話を聞きたかった」「そもそもインストラクター側の能力を高める必要がある」「図書館でのトラブル事例などをQ＆A形式でまとめたものなど，より実践的な情報をいただけたら」「原因の部分でなく，対策の部分をもっと厚くして欲しかった」などの要望も目立った。

次のステップは、スライドショーの作り方、コンテンツの保存・加工の方法、ホームページ上でのパスファインダー（情報探索ガイド）の公開方法等についての技術的な講習会である。

6．当面の取り組み計画

問題の共有化、動機付けのあと、研究室単位の組織的な取り組みへ向けてどう離陸するか。その成否は今後の具体的な活動支援計画しだいである。改善のエネルギーを具体的な成果に結実させるには、個々のインストラクター自身に、研究室の教員、先輩、同僚、後輩の理解と協力を仰ぎつつ、自らの力量を向上させ、各種のツール作りを推進してもらわなくてはならない。教員や図書館員の側にも、自らの本来業務の「丸投げ」と受け取られないよう、彼らを積極的に指導し支援する責任がある。

所沢図書館としては当面、eラーニングコンテンツの提供と併行して、メーリングリスト上での情報提供、講習会や会議の開催などの形で、各インストラクターの活動を支援して行きたい。

7．展望

この取り組みが軌道に乗れば、各研究室内ではより効果的効率的な文献調査法が組織的に伝承されるようになり、他の研究室・学科・学部等との間で教育研究を相互に支援しあうことも可能になる。いずれ各種パスファインダー群は専門分野別、レベル別、用途別等の巨大なリンク集に成長していく。高品質なパスファインダーは実用検索ツールあるいは情報リテラシー教材として、学内だけでなく他大学・他図書館、さらに一般市民にも活用されるようになり、大学の知財による社会貢献の一形態としても広く注目されるに違いない。

■注

1）早稲田大学所沢図書館ホームページ：
http://www.wul.waseda.ac.jp/human/index-j.html

2）『情報の達人』の活用方法：
http://www.wul.waseda.ac.jp/human/johonotatsujin.html

3）インストラクター講習会のご案内と報告：
http://www.wul.waseda.ac.jp/human/koshukai2008-instructor.html